美の基幹となる中心地にはフランスがあったということは言うまでもなく事実であろう。個人的に思うところでは、その中で「女性の美」というものが真骨頂に達したときというのは、フランスの18世紀～19世紀であったであろう。女性と美に関しては常に相関関係にあり、いつの時代においても語られたが、もっとも現代に近く、現代の美の根幹になったのが18、19世紀のフランスではなかろうか。
社会の美というのは、時代の変化と共にその形に一定の変化が伴った。ある時は、日焼けをしたような健康的な肌が、またある時には真っ白な「美白」肌が、そしてあるいは金髪や赤い唇、黒い瞳、さらりと流れるような髪の毛など、時代の美は多種多様な形でその社会の理想形を代弁していた。「その時代が求める美」に近づけるようにと、女性の努力が現代に至るまでも続けられてきた中、女性達は、「男の帝国」である社会で、「美」という手段を用いて自己生存を図っていたのであろう。世紀の支配者の裏には、違う形の支配者として世紀の流れを掌握する「美」という武器を纏った女性達がいた。その女性達にとってのモードは、美の絶対主義的な理想として存在することで、女性達を支配していたであろう。
「美・モード・ファッション」、それは必ずしも女性の占有物とは言えないが、女性達は自分達の集団的な自己表現の手段として、モードを決めたのは間違いないであろう。現代においてモードは、本来の意味とはまた違う意味で、女性のみの何か特別な意味を持つようになった。それが美を求める女性にとって、ある種の自由を与えたものなのか、それとも自由を奪ってしまったものなのか、これから明らかにしてゆきたい。
18、19世紀のフランスは大変革の時代であった、ということは今更言うまでもないことである。その中で形成されていたモードとは驚くべきものであった。18世紀においては、かの有名なマリーアントワネットを拝見すれば分かることであるが、なんて手の込んだ髪型であろうか。その当時の女性の主要な髪形を他にも数多く拝見したが、どれも驚くほど手の込んだものであった。幾重にも及ぶ結上げ、巻き髪・・・そして驚くべき頭の大きさである。帽子も取り上げるべき―モードであろう。様々な帽子、しかも大きく華やかさを主眼に置いたデザインのものばかりである。挙句の果てには結った髪に枝を挿している女性もいるではないか。現代では考えにくい状況である。また19世紀においては、コルセットがモードの一部分として機能した。

しかも驚くべきことに、さらなる美を追求するために、肋骨の骨を手術で抜き取る女性も多かったとのことであった。中には手術中に激痛のあまり気絶してしまった女性も数知れず…何が彼女達をそこまで駆り立てたのであろうか。

突然だが、私は今ダイエットをしている。なぜかというと、痩せた体を手に入れ、男の目線を引きたい、そして更なる美を追求したいという考えからである。急になぜこのようなことを言い出したかというと、私は、モードは表面的には本質的には昔も今も何ら相違ないと考えるからである。私を例にとりモードを考えてみたいのだ。私は男の目線を引きたい、という理由で痩せた体というモードの方向性を目指している。「男の目線を引く」というのは、女性にとっては一種の自己保存の象徴であろう。当時のフランスの女性もなぜ華やかさをそこまで追及したのかというと、男の目線を釘付けにするような華やかさを追求、そして競っていたためではないだろうか。そしてもう一つ、「さらなる美を追求」したい、という私の理由。そう、私は「美」という絶対的概念に向かっているのである。フランスの女性も御多分に洩れず、「美」というある種の絶対的価値に向かっていたのではないかと思う。ではその「絶対的価値」とは？　それこそまさに「モード」である。しかもこの絶対的価値こそ相対的なのである。この、いかにもパラドックス的な表現にはある重要な意味がこめられている。それこそがモードの特性であり、また重大な弱点でもある。それは一体何であろうか。
それはこの言葉に集約されるだろう。「モードは絶えず変化する」 これではあまりに抽象的過ぎるだろうか。つまり、モードとは、モードとなった瞬間に、さらなるモードを求め、廃れてしまうという逆説的な二面性を持ち合わせているのである。さらに言えば、モードの絶対的価値の内容は流動的なものであり、それ故相対的にならざるを得ないというパラドックスをもはらむのだ。モードはそれ自体、普遍化した瞬間に特殊を求め、それ故普遍が廃れ、特殊が普遍化する、そしてまた普遍化した瞬間に…という繰り返しこそモードの特性であり、また弱点である。モードの絶対的価値に魅せられ追いかけつつも、モードのその特性に振り回され奔走する女性。美は常に一定の方向に女性を導く一方で、常に違う方向を求めているのだ。
ここに一つの結論が見えてきたであろう。「モードは、美を求める女性にとって、ある種の自由を与えるものなのか、それとも自由を奪うものなのか。」2つのテーゼとも真である。理由はただ一つ、「モードの特性」ゆえに、である。モードの普遍化によって女性はその普遍化された絶対的価値に向かって突き進むが、廃れるや否や新たなモードを求め奔走する。

すなわち、普遍化したモードにより女性は一定の方向に進まざるを得なくなり、自由を奪われることになるが、一方で廃れたモードに対して、女性は一定の方向ではなく、あらゆる方向へ進む。普遍化されるべき「特殊」を捜し求めるために！　それ故、モードは一種の円環構造をなしているといえよう。「美・モード・ファッション」、これらの言葉は永遠に消えることがないだろう。私達女性は自由であり不自由なのだから・・・

参考文献：「モードの帝国」山田登世子　「モードの迷宮」鷲田清一
「十八世紀パリ生活史（上・下）」メルシエ著・原宏訳
「美女の歴史」ドミニク・パケ　以上